

動物倫理における動物と人間の類比

久保田 さゆり

はじめに

本稿では、J.M. クツェーの小説『動物のいのち』を主に参照しながら、動物倫理の議論においてしばしば用いられる、人間以外の動物の扱いとホロコーストとを類比させる表現を検討する。それによって、この類比の試みが、動物への配慮の必要性をめぐる議論にどのような形で影響しうるのかを明らかにしたい。そのため、ホロコーストがそもそも類比の対象になりうるのかという点や、ユダヤ人等に起こったことと動物に起こっていることとを類比的に語る事が、実際に、虐殺の犠牲になった人々や、虐殺を生き抜いた人々を侮辱することになるのかといった点を検討するというよりも、そうした類比をすることによって、動物への配慮を主張する人々は何をしようとしているのか、あるいは何をしていることになるのかという点に主に焦点を合わせる。また本稿では、ホロコーストとの類比を主に扱うが、人間にたいするさまざまな他の深刻な危害と、動物にたいする危害とを類比させる表現の多くにも広くあてはまる問題を論じているつもりである。

1 『動物のいのち』における類比的表現

動物への倫理的配慮の必要性を論じる著作には、動物にたいする人間の行為を、人間による他の人間にたいする行為と類比させる記述がしばしば見られる。たとえば、P. シンガーが、現代において人間以外の動物がおかれた状況を、かつての奴隷制度にたとえていることはよく知られているだろう¹。こうした表現を用いる著作は、それによって、動物にたいする人間の行為がどのように道徳的に深刻であるのかを描き出そうとしていると言える。

そうした類比的表現のなかでも特に目立つもので、ときに批判や反感を招くものに、人間による動物にたいする扱いを、ナチスによるユダヤ人等にたいする扱いと類比させるものがある。たとえばT. レーガンは、「私たちは、動物たちにとってのホロコーストという言葉をあえて用いるか」²と問い、この類比について、動物のおかれた状況の深刻さを表現するものとしてとらえているようである。また、C. パターソンの『永遠の絶滅収容所——動物虐待とホロコースト——』³は、現代の私たちが動物に向ける理解や動物に強いている制度について、歴史的な差別的迫害との類似点を明らかにするような数々の記述をまとめ

¹ 『動物の解放』1975年版への序文の冒頭では、動物の状況が「何世紀にもわたる白人の黒人に対する専制政治とのみ比肩しうるものである」（Singer 2002, p. xx [邦訳書 12頁]）と述べられている。なお、本稿で特に注目することになるのは、動物の行動や情緒的なあり方を人間のものと類比させる記述というよりも、動物にたいするふるまいと、人間にたいするふるまいを類比させる記述である。

² Regan (1987), p. 77. 強調は原文。

³ Patterson (2002).

あげた著作である。この著作のなかでは、「最初に人間が動物を搾取し屠畜する。次に人間が他の人びとを動物のように扱い、動物に対するのと同じことをする」⁴といった仕方で、ホロコーストと工場畜産の類似性が表現されている。こうした表現は、現在、動物にたいして人間が課しているさまざまな制度や実践が、どれほど凄惨で不当なものであるかを、ショッキングで、無視することができないような仕方で読者に伝えようとしていると言える。

しかし、こうした類比は、動物に強いられている状況を伝えるために本当にうまく働いているのだろうか。もしかしたら、人間と動物はまったく違うのだから、ホロコーストの例に限らず、人間にたいする行為や制度と、動物にたいする行為や制度を類比的にとらえることなどそもそもできないし、理解可能でないと考える人もいるかもしれない。あるいは、歴史的な重大さが計り知れないと言われる出来事を、動物に生じていることの説明に用いるのは、不適切だと考える人もいるかもしれない。後で取りあげるように、実際、そうした反応もこの類比は引き起こしているのである。

動物倫理における以上のような類比の表現について、本稿では、J.M. クッツェーの作品『動物のいのち』⁵における記述を中心に、動物にたいする扱いをホロコーストとの類比によってとらえる表現がもつ問題と意義とを検討していく。

『動物のいのち』は、プリンストン大学におけるタナー記念講演で、著者のクッツェーが実際に行った講演をもとにした作品である。その講演においてクッツェーは、アップルトン・カレッジでの講演会に招かれて「哲学者と動物」と「詩人と動物」という題目で講演を行う小説家エリザベス・コステロについて描かれたフィクションを読みあげるといった形の講演を行った。登場人物であるコステロは、息子のジョン、その妻ノーマ、その子どもたちを含めた、周囲のごく普通の人々が動物たちに向ける態度に苦しみ、戸惑い、疲弊している人物として描かれている。

コステロは自身の講演において、現在の工場畜産の様子をホロコーストと類比的に語ることで、動物にたいするわれわれの扱い方が、偏見に満ち人間性を破壊するような忌まわしいものであると語る。「『屠殺に向かう羊のように彼らは行った』とか、『彼らは動物のように死んだ』とか『ナチの屠殺者が彼らを殺した』とか、収容所にたいする告発のなかでは家畜置き場や屠殺場に関する言葉が響きわたっているので、これから私がおこなおうとしている比較の下地は、すでにほとんどできあがっています」⁶とコステロは述べる。そして「私たちは墮落と残酷と殺戮の企てに取り囲まれていて、それは第三帝国がおこなったあらゆる行為に匹敵するものです。実際、私たちの行為は、終りがなく、自己再生的で、ウサギを、ネズミを、家禽を、家畜を、殺すために絶え間なくこの世に送り込んでい

⁴ Patterson (2002), p. 109 [邦訳書 162 頁] .

⁵ Coetzee (1999).

⁶ Coetzee (1999), p. 20 [邦訳書 30 頁] .

るという点で、第三帝国の行為も顔色なしといったものなのです」⁷と主張する。そのうえで、ユダヤ人を虐殺した人々や虐殺にたいして見て見ぬふりをしてきた人々が、犠牲者の立場に立とうとせずに心を閉ざしていたのと同様に、私たちは屠殺場で行われていることにたいして見て見ぬふりをして心を閉ざしていると指摘する。

こうしたコステロの主張にたいする抗議として、講演の出席者である詩人のスターンは、講演の後に行われたコステロを囲む夕食会を欠席する。スターンはコステロに宛てた手紙で次のように述べている⁸。

貴女はご自分の目的のために、ヨーロッパで殺されたユダヤ人と屠殺された家畜という、ありふれた比較を借用しておられました。ユダヤ人は家畜のように死んだ、したがって家畜はユダヤ人のように死ぬ、とあなたはおっしゃる。これは言葉によるごまかしであり、私はそれを受け入れるつもりはありません。貴女は類似性というものを誤解しておられる。意図的に、ほとんど冒涇と言ってもいいまでに誤解しているとさえ申しましょう。人間は神に似せて創られましたが、神が人間と似ているということはないのです。もしユダヤ人が家畜のように扱われたとしても、家畜がユダヤ人のように扱われているということにはならないのです。たんに逆に置き換えることは、死者の霊にたいする侮辱です。それはまた、収容所の恐怖に安っぽいやり方でつけ込むものです。

こうした率直な批判を知ったうえで、それでもなお、最後のシーンでコステロは、動物をめぐる人間のあり方に、ホロコーストのイメージを重ね合わせている。コステロは、自分が現実の世界で生きていくことにどれほど困難を感じているかを息子に語る。コステロにとっては、ごく普通の善良な人々に見える自分の周囲の人々が、ユダヤ人の虐殺のような犯罪に関わり、その結果を享受している人々としてどうしても見えてしまう。そしてそのようなとらえてしまったコステロは、そのような現実と折り合うことができない。その苦悩にたいして息子のジョンは、コステロの苦しみの本質を共有することなく、ただ、母であるコステロの苦しみや世間的立場を気づかうことしかできない。

コステロとスターンの間には、ユダヤ人と動物との比較をめぐる、大きな対立が生じている。実際、動物に生じることを、人間に生じた深刻で恐ろしい出来事と類比的に語ることにたいして、このような批判が生じることは十分に理解可能なことである。とはいえコステロは、無知ゆえに安易な比較をしているわけでもなければ、他者の感情や批判に無関心な人間であるわけでもないはずである。ユダヤ人と動物との類比が批判や怒りを招きうるということを知ったうえで、なぜコステロはその類比にこだわり続けるのだろうか。

⁷ Coetzee (1999), p. 21 [邦訳書 32 頁] .

⁸ Coetzee (1999), pp. 49-50 [邦訳書 82 頁] .

2 ホロコーストとの類比をめぐる議論

『動物のいのち』をめぐって、E. アールトラは、コストロが工場畜産とホロコーストを並置することで、動物の扱い方の問題をその人の人間性に関わるような深刻な問題として提示するという説得方法に注目する⁹。コストロは、工場畜産とホロコーストを並置することで、工場畜産において行われていることについて知らないふりをする人々を、収容所の周りに住んでいてそこで起きていることについて知らないふりをしてきた人々、その人間性が疑われるべき人々と同一視する。アールトラは、コストロがこうした文学的な表現方法を用いることで、単に「動物を殺すことは道徳的に間違っている」と言うよりもずっと効果的に人々に衝撃と不快感を与え、そのことによって人々に再考を促していると主張する¹⁰。

確かに、アールトラの言うように、工場畜産をホロコーストにたとえることによって、工場畜産の何が問題であるのかが鮮やかに描き出されることになる。しかし、そうした仕方ではホロコーストを「利用する」ことは、スターンが指摘しているように、犠牲となったユダヤ人にたいする冒瀆ともみなされうる。スターンの批判にこたえなければ、コストロがスターンの訴えを事実上無視して、最後までホロコーストとの類比にこだわり続ける理由を明らかにすることはできないだろう。

ここでは、いったん『動物のいのち』のコステロから離れて、ホロコーストと動物にたいする扱いとの類比自体の是非について論じる議論を検討したい。D. スタイベルは、ナチス政権下のユダヤ人に起こったことと、現代の動物に起こっていることを比較することは実際に可能であり、そうした類比に訴えることは、ホロコーストの犠牲者を侮辱することではなく、また、ホロコーストの重大さを矮小化することでもない¹¹と主張する。スタイベルは両者に関して比較可能と考えられる観点を4つに分類し、具体的な39項目を挙げる。つまり、ユダヤ人も動物も価値をないがしろにされるような行為や破壊の対象になっていること（好奇心による生体解剖、皮革や脂の利用、収容所の過密状態など）、そのために用いられる仕組み（迫害を見えなくさせる教育制度、殺害の効率性の重視など）、そうした行為に関わった人々の態度（加害者による責任の否定、無関心など）、ユダヤ人や動物をめぐる表現（「地獄（hell）」という表現や、悪魔とみなされることなど）という観点である。スタイベルによれば、これらの点で、ユダヤ人迫害と、動物解放論者が動物にたいする迫害とみなすものとの間には、重要な類似がある。

もちろんスタイベルもまた、こうした類比がホロコーストの犠牲者にたいする侮辱だという批判を真剣に受けとり、検討している。自身もホロコーストの生存者の子孫だというスタイベルは、収容所の生存者自身が、動物が被っている苦痛にたいして共感的になり、

⁹ Aaltola (2010).

¹⁰ Aaltola (2010), p. 134.

¹¹ Szybel (2006).

自分自身の経験と動物の状況とを真剣に類比している例を挙げる¹²。そのうえで、動物解放論者が、十分な敬意をもって、真剣にホロコーストとの比較をしているのであれば、そうした主張それ自体は許容されるべきであり、それは、ホロコーストとの類比に異を唱える人の見解が許容されるべきであるのと同じだと言う¹³。スタイベルによれば、侮辱的な仕方での比較だとみなされるのは、動物にたいする危害の方がずっと数が多く、浸透もしているから、ホロコーストの方が重要度が低いと主張することや、ホロコーストの生存者と犠牲者の間の情緒的つながりを否定したり低く評価したりすること、ホロコーストは過去のものだとして述べて、動物にたいする現在と未来の扱いを論じるべきだと主張することである¹⁴。ほとんどの動物解放論者は、もちろんそうした主張をしているわけではない。にもかかわらず、もし解放論者による類比的な表現を侮辱だと感じるとしたら、それは、そう感じる人が「動物」を、好きなように害してもいいような存在としてあらかじめ理解しているからなのではないかとスタイベルは指摘する¹⁵。

さらに関連する批判として、動物にたいする扱いをホロコーストと類比させることは、ホロコーストの犠牲者や生存者の苦しみを矮小化するものだという批判についてもスタイベルは検討している。こうした批判にたいしても、スタイベルは、批判者は動物の被っているさまざまな危害の重大さをあらかじめ低く評価しているのではないかと指摘する¹⁶。もちろん、ホロコーストと動物の扱われ方との間にはいくつかの違いがある。それでも、そうした違いは、両者の比較を可能にするような類似性をなくしてしまうようなものではない。どちらにおいても、対象が単に自分とは異なるということを理由に、かれらにたいして危害を加える資格を自分たちに与えるという点で、差別的迫害に共通の想定をもっていとスタイベルは主張する¹⁷。スタイベルによれば、ホロコーストとの比較は実際に可能であり、人間以外の動物にたいする人間の迫害について明白にするのに役立つ啓発的なものである¹⁸。

3 類比の意図

スタイベルの議論は、『動物のいのち』のスターンによる批判にこたえられるだろうか。問題なのは、スターンからは、コステロによる比較が（真剣なものではあるものの）敬意をもったものとはみなされていないことである。確かにスターンは、スタイベルが指摘するような形で、動物がもつ重要性をはじめから否定しているように見える。しかし、おそらく、多くの動物解放論者やスタイベルが考えている比較と、スターンの考える比較との

¹² Sztybel (2006), pp. 98–100.

¹³ Sztybel (2006), pp. 121–122.

¹⁴ Sztybel (2006), p. 122.

¹⁵ Sztybel (2006), p. 123.

¹⁶ Sztybel (2006), pp. 124–125.

¹⁷ Sztybel (2006), pp. 125–126.

¹⁸ Sztybel (2006), p. 130.

間には、もっと別のすれ違いが生じていると思われる。ここではコストロ自身の考えはひとまずおき、動物にたいする扱いとホロコーストとの類比が、それ自体としてどのような構図になっているのかを明確にすることから始めたい。

前述したように、スターンは、「ユダヤ人は家畜のように死んだ、したがって家畜はユダヤ人のように死ぬ、とあなたはおっしゃる。〔…中略…〕もしユダヤ人が家畜のように扱われたとしても、家畜がユダヤ人のように扱われているということにはならない」とコストロを批判している。こうした批判たいして、上述のスタイベルがするように、ユダヤ人も動物も同じようにひどい扱いの対象となっているのだと応答したとしても、この類比が十分な敬意を払ったものとしてスターンに受け入れられることは難しいように思われる。

まず、スターンと、ユダヤ人と動物の類比を用いる動物解放論者のすれ違いがどこにあるかを見るために、スターンが述べる2つの区別を明確にしたい。つまり、「ユダヤ人が家畜のように扱われた」という比較の仕方と「家畜がユダヤ人のように扱われている」という比較の違いである。

はじめに、スターンも認めている前者の比較から見てみよう。この表現は、ユダヤ人にたいする扱いを、当時の動物にたいする扱いにたとえている。これは、ユダヤ人にたいする扱いがひどいものであったということを表すために、道徳的地位をもつはずのユダヤ人が、道徳的地位をもたないものと同じ扱いをされたと指摘する表現として受けとることができる。つまり、類比の対象である家畜は、道徳的地位をもたないし、そのように扱われてもいい存在であり、実際にひどい扱いを受けているというのが、この類比を成り立たせている前提である。

では、後者の比較が、上述の類比関係をそのまま適用しながら、類比の2つの項を単純に入れ替えたものとして理解されたとしたらどうだろうか。つまり、「家畜がユダヤ人のように扱われている」という表現が、もし先ほどと同様に、道徳的地位をもつはずの家畜が、どのように扱われても問題のない、道徳的地位をもたない存在と同じ扱いをされると指摘することによって、その扱いがひどいものだということを表そうとするものならば、当然、それはユダヤ人にたいする侮辱だと批判されるだろう。スターン自身もこの類比をそのようにとらえているわけではないだろう。また、こうした類比表現に訴える人ももちろん、そのようなことを考えているわけではないはずである。この表現を成り立たせている前提は、ユダヤ人が道徳的重要性をもつこと、本当は道徳的重要性をもつにもかかわらず、道徳的に許されがたいおそろしい行為の対象となった存在だということである。つまり、後者の比較は、すでに道徳的地位が認められており、道徳的に許されがたい行為の対象となった存在として現代の人々に強く印象付けられている存在と類比させることによって、まだ道徳的な重要性が人々に浸透しているとは言えない存在にたいする行為が、道徳的に問題のあるものだと訴えかけるものである。

したがって、ユダヤ人と家畜の扱いを類比させる2つの表現は、単にユダヤ人と家畜を置き換えているのではなく、それらには重要な違いがあると言える。「ユダヤ人が家畜の

ように扱われた」というときの類比の意味は、「まるで、家畜という、道徳的地位のない、どのように扱っても問題のない存在であるかのように」ユダヤ人が扱われたという意味である。それにたいし、「家畜がユダヤ人のように扱われている」というときの類比の意味は、それとは異なり、「道徳的重要性をもつ存在であるにもかかわらず、道徳的に不正なおそろしい行為の対象になっていたユダヤ人のように」現在の動物たちは、その道徳的重要性にもかかわらず、おそろしい行為の対象になっているのではないかという指摘として受けとることができる。ユダヤ人と動物の類比は、確かに交換可能な仕方で用いられているかのようにも読めるが、それぞれの類比がもつ意味は異なる。現代の動物にたいする扱いが、ユダヤ人にたいする扱いと類比されるのは、むしろ、ユダヤ人が被った危害の重大さやホロコーストの重要性を十分に理解しているからこそだと言えるだろう。

こうした理解を明確にすれば、この類比に訴える動物解放論者の多くが、ホロコーストの犠牲者や生存者に敬意を払っているということには同意が得られるかもしれない。しかしそれでもなお、当の類比が、スターンの指摘するような懸念を生じさせると考えられる点があることは指摘しなければならない。というのも、ホロコーストによって犠牲者や生存者が受けた危害は、家畜動物が工場畜産というシステムによって受ける危害には含まれない種類の、重要なものを多く含んでいるはずだからである。ホロコーストの犠牲者や生存者の多くは、将来の夢や計画、家族、友人、信頼関係、（遺体の扱いも含めた）人間としての尊厳といった多くの重要なものを奪われたと言えるだろう。そして多くの動物は、それらを人間と同じような仕方で危害として被るような存在ではない。もちろん、動物が長期的な事柄にたいする欲求をもつことはありうるだろうし、スタイベルが指摘するように、動物もまた親と子が引き離されることによって苦しむこともありうる¹⁹。さらに、動物の状況との類比によってホロコーストの犠牲者の苦しみが矮小化されると考える人が、そもそも、動物の利害を矮小化して理解してしまっている可能性には注意しなければならない²⁰。それでもやはり、動物の経験の仕方にはないような複雑な側面を、人間が典型的にはもつということも事実だろう。そのため、動物が工場畜産というシステムのもとで、ホロコーストの犠牲者と同じように危害を受けているという考えは、行きすぎたものかもしれない。

もちろん、当の類比を用いる動物解放論者の多くも、動物の苦しみと、ホロコーストの犠牲者や生存者たちの苦しみとが、同等だとは考えていないだろう。おそらく動物解放論者は、虐殺が奪うさまざまな重要なもののうちの、主に身体的苦痛を重視して、ホロコーストの犠牲者や生存者との類比に訴えている。それでもそれによって、たとえばホロコーストの犠牲者や生存者が抱いていた夢や、彼らの尊厳や、他の人々との信頼関係といったものの重要性が否定されるわけではない。確かに、人間だけが奪われるような価値あるものももちろんあるが、甚だしい身体的苦痛を被ることなく生きるということは、人間にも

¹⁹ Sztybel (2006), p. 111.

²⁰ Sztybel (2006), pp. 124–125.

動物にも共通する、価値ある生の基本をなすものである。そしてそれこそが、動物にとっては生きる喜びに最も大きく関わるものでもある。ホロコーストとの類比に訴える動物解放論者は、それが奪われているという点を、両者の共通点として重視していると言えるだろう。

それでもやはり、この類比に不用意なところがあるのは確かである²¹。にもかかわらず、こうした類比に訴える意義はあるのだろうか。

4 動物倫理の議論状況

ここまで確認してきたように、動物解放論者がホロコーストとの類比に訴えるとき、ホロコーストの犠牲者や生存者の苦しみがもつ重要性を十分に理解し、それが共有されていると前提しているからこそ、そうした表現を用いているとは言えそうである。それでも確かに、この類比には疑問の余地もある。先に述べたように、人間が被る危害と、動物が被る危害の間には違いがあり、ホロコーストの犠牲者や生存者が被った重大な苦しみのうち、動物が共有しているのはその一部だからである。

それでも、そうした違いがあることを前提としたうえで、こうした類比に訴えることは、どのような意図のもとでなされ、どのような倫理的な意義をもちうるのだろうか。そこには、動物倫理の特殊な議論状況が関わっていると考えられる。つまり、動物倫理の議論には、人間をめぐる多くの倫理的議論とは違って、「倫理的な重要性がまだ十分には認められていない存在の倫理的な重要性を認めさせる」ための議論が必要である。おそらく多くの人にとって、動物は、確かに不必要に虐待してはならない存在ではありうる。しかし、比較的容易に人間の利益と引きかえにして、苦痛を伴う仕方で扱ったり、殺したりしても許されるような存在だともみなされているだろう。動物にたいしては、人間の利益を犠牲にするほどの道徳的な重みを見いだしていない人がほとんどであると考えられる。そのように、議論の相手が、そもそも議論の主題である存在の価値を十分に認めていないという状況では、まずはその存在の倫理的な重要性や、議論自体の重要性に気づかせる必要がある。そのためには、議論の相手自身がすでに認めている価値に、何らかの仕方で訴えるしかない。卑近な例を挙げるとすれば、ある人が、金銭的価値だけを価値として認めており、友人がくれた金銭的価値はほとんどない、しかし思い出のつまみ食いぐみ捨てようとしていたとしよう。そのとき、ひとまずそれを止めるにはどうしたらいいだろうか。それを捨てられたことによって友人が受けるショックをその人に理解させるために、その人の認める価値である金銭的価値に訴えて、「それを捨てられたらあなたの友人は、あな

²¹ おそらく、スターンによる批判は、人間と動物との間には絶対的な隔絶があるのだというものである。そこには、動物が何らかの道徳的価値をもっているとしても、それは人間の価値とは比べようもないという考えが前提されていると思われる。つまり、スターンが神と人間の関係に訴えていることを踏まえると、スターンにとっては、動物にたいする行為を、人間にたいする行為になぞらえることは、たとえ両者に類似性があったとしても、冒瀆的であり、類比として不適切であることになる。

たが 100 万円を失ったのと同じだけのショックを受けるのだ」と指摘するのは、少なくともその人にとっては効果のある方法だろう。こうした状況のように、議論の相手が、人間にしか十分な倫理的な重要性を認めていないというのが、動物倫理の現状である。そうしたなかで、動物が道徳的重みをもつということ自体を論証することは困難である²²。ホロコーストとの類比は、そうした論証を回避し、議論の相手自身が価値を認めているものになぞらえた表現を用いることで、動物の価値にたいする多くの人々の理解に、待ったをかけようとしていると考えられる。

特に、ホロコーストとの類比は、ただ、ホロコーストの犠牲者と動物とを類比させて、動物が被る危害の重大さを指摘するだけのものではない。ホロコーストとの類比は、行為者側の問題性を直接に指摘する側面ももつ。『動物のいのち』におけるエリザベス・コストロがホロコーストと重ね合わせているのは、本来なら喜びにあふれた存在である動物を苦しめて殺すことそれ自体というよりも、ごく普通の優しさをもつ人々が、ある対象を、自分たちとは異なる劣った存在とみなして、かれらに共感する心を閉ざし、そうした存在からすべてを奪うことや、かれらが感じているはずの圧倒的な苦痛にたいして無関心になるという、人間のあり方の方である。また、『永遠の絶滅収容所』の第6章では、ホロコーストの生存者や、ホロコーストについて学ぶ人々が、動物の苦しみにたいして共感的になるさまが描かれるとともに、動物にたいする人間の残酷さや、動物の苦しみにたいする無関心に、ナチスとの類似性を見だし、それを変えようとするさまが描かれている²³。つまり、ホロコーストとの類比は、工場畜産のような制度が存続するのを助けている行為者である、人間ひとりひとりに焦点を合わせて、動物の苦しみや死から利益を得ている現状にたいして無関心ではいられなくさせるための比較でもあると言える。この点もまた、動物がもつ道徳的重みを直接に論証することを避けながら、動物にたいする私たちの行為に再考を促すものである。

また、『動物のいのち』のコステロに注目すると、ホロコーストとの類比がもつ別の側面も見えてくる。動物をめぐる状況は、再度述べると、人間が人間にたいしてのみ認めている倫理的価値に訴えることでようやく耳をかしてもらえするという状況である。それは、動物自身の生がもつ重みに目が向けられているということとは異なる。『動物のいのち』で描かれているのは、そうした状況に苦しむコストロの姿である²⁴。コストロは、世界がユダヤ人の虐殺や虐殺にたいする無関心と同じものであふれているように見えてしまうこと、そしてそのような見方が人々に理解されず、孤独であることに苦しんでいる²⁵。そのように

²² 動物倫理の議論として、動物が道徳的地位をもつと証明しようとする議論に立ち入ることを回避すべきだという議論に Zamir (2007)がある。特に Chap.2 を参照。

²³ Patterson (2002), pp. 139–167 [邦訳書 201–241 頁]。

²⁴ 久保田 (2014) では、文学作品が動物倫理においてどのような役割を果たすのかを論じた。ここでは、本稿よりも広い関心のもとで『動物のいのち』におけるコストロが、動物をめぐる状況に苦しむ存在として描かれていることがもつ意義を指摘している。

²⁵ コステロは、ホロコーストでユダヤ人が被った危害と、工場畜産において動物が被っている危害とを区別することにたいして、おそらく消極的である。コストロにとっては、動物も充足した存在である点で人間と同じであり、それにもかかわらず、そこに区別を設けようとするところこそ、ホロコーストを生

描かれたホロコーストの姿は、動物の現状のおそろしさを直接読み手に伝えるというよりも、ホロコーストによる世界の見え方自体を共有させる働きをもつ。そしてそれによって、ホロコーストについて考える人が世界を見る見方と同じような見方と態度を世界に向けてしまうほど、動物の問題が深刻でありうるということを、間接的に示していると言える。

動物倫理の議論において最も骨の折れることは、対象である動物の倫理的重要性を多くの人に認められる仕方で示すことである。しかしすでに触れたように、ある存在の倫理的な重要性を論証によって示すことは困難である。本稿で論じてきたように、そうした状況であるがゆえに、こうした類比が用いられてきたと考えられるが、結局のところ、この類比によって描きだされるのは、行為者である人間の道徳性と、その行為によって苦しむ人間にたいする倫理だと指摘することもできる。

もちろん、本来は、こうした類比に訴えるのではなく、動物のあり方を詳細に描いて、動物のもつ道徳的な重み自体がそれによって理解され、受け入れられるよう試みるという道筋がとられる必要があるだろう。先述した金銭と思い出の価値の話でたとえるならば、金銭にしか価値を見いださない人にたいして、根気強く、思い出が人生にたいしてもつ意味を伝えていくという説得方法が、本当であれば理想的だろう。もちろん、そうした説得方法においても、たとえばお金が人生において果たす役割を、思い出も果たすことができると指摘するといった仕方で、結局、金銭的価値に言及することにはなるかもしれない。しかし、それは思い出の価値を金銭換算するのではなく、思い出自体の価値に気づかせる説得方法である。動物倫理の議論の場合もまた、人間と動物に共通する部分が、両者の生の喜びの基礎をなすような重要な部分であり、倫理にとっても重要であると論じるという道筋がありうる。それが理解され、受け入れられなければ、本当の意味で動物倫理の議論が成功したことにはならないだろう。それでも、すでに進行してしまっている事態にたいして、一刻も早く相手の理解を変える必要に迫られたとき、本稿で検討してきたような類比表現が、大きな役割を果たすという面もある。

多くの動物倫理の議論では、動物のもつ能力を人間のものと類比させたり、動物にたいする行為を人間にたいする行為と類比させたりすることで、動物がもつ価値にたいする私たちの理解を変えようとしている。本稿で検討してきたホロコーストとの類比は、ホロコーストの重大さゆえに批判にもさらされてきた。この類比を用いることには、本節で検討してきたような意義がありうるものの、それを用いる場合には、ホロコーストの重大さが人々の間で共有されているという前提と、その共有されている価値に訴えた類比なのだというを明確に伝えるべきだと言えるだろう。

むような、心を閉ざすあり方であるだろう。

文献

- Aaltola, E. (2010), “Coetzee and Alternative Animal Ethics,” in Leist, A. and Singer, P. (eds.), *J. M. Coetzee and Ethics: Philosophical Perspectives on Literature*, Columbia University Press, 2010, pp. 119–144.
- Coetzee, J. M. (1999), *The Lives of Animals*, Princeton University Press. [J. M. クッツェー『動物のいのち』森祐希子・尾関周二訳、大月書店、2003年。]
- Patterson, C. (2002), *Eternal Treblinka: Our Treatment of Animals and the Holocaust*, Lantern Books. [チャールズ・パターソン『永遠の絶滅収容所——動物虐待とホロコースト——』戸田清訳、緑風出版、2007年。]
- Regan, T. (1987), *The Struggle for Animal Rights*, International Society for Animal Rights.
- Singer, P. (2002), *Animal Liberation*, HarperCollins Publishers. [ピーター・シンガー『動物の解放 [改訂版]』戸田清訳、人文書院、2011年（邦訳書は原著2009年版に基づく）。]
- Sztybel, D. (2006), “Can the Treatment of Animals Be Compared to the Holocaust?,” *Ethics and the Environment* 11(1), 97–132.
- Zamir, T. (2007), *Ethics and the Beast: A Speciesist Argument for Animal Liberation*, Princeton University Press.
- 久保田さゆり (2014) 「動物倫理における文学の役割」、『倫理学年報』第63集、231–244頁。

(くぼた さゆり／日本学術振興会特別研究員・千葉大学)